

『現代に生きる能 - 演技の美しさと謡の楽しさ - 』講演：野村 四郎
平成14年3月9日

曲目の種類と実演

仕舞は地謡と称するコーラスを伴って基本的には扇一本を持って舞う簡素な短い物です。パンフレットにも書きましたように曲目の種類と実演と言うことで一番先に舞いましたのが「高砂」といいます。内容は「平和と長寿、夫婦愛、そして神の祝福」であります。

その次が「敦盛」、三番目に舞いましたのが「羽衣」、それから「天鼓」、最後に長刀を持って舞いましたのが「船弁慶」です。

大きな字で「神（しん）」「男（なん）」「女（じょ）」「狂（きょう）」「鬼（き）」というふうに当ててありますが、古来より能の種類を「神」「男」「女」「狂」「鬼」と言うように言い表しており、これが全てであります。

「神（しん）」は神のこと、今の高砂ですとか竹生島、老松などがありこれは神が登場する作品です。

それから「男（なん）」、男子です。これは「修羅能」とも言います。源平の武将などを「シテ」主役にして能がドラマティックにすすんで参ります。これらの作品群を修羅能、「男」と申します。清経、屋島などがこれらの作品です。

三番目に舞いましたのを我々は「三番目物」と申しています。丁度お料理で申しますとメインディッシュに当たります。中心になるものです。三番目物の種類は非常に数が多いです。代表的な物は、今の「羽衣」。この作品は必ずしも「三番目物」にふさわしいとは言いきれないのですが、「羽衣」も大きな分類ではこの中に入ります。そのほか宮廷の女性を扱ったり高貴な女性と申しましょうか、そういう人達が登場してくるのが「三番目」です。「女（じょ）」でございます。

「狂（きょう）」というのは、近頃、狂という言葉が良いか悪いかはわかりませんが、能の方では「狂女物」と申しまして、母親が子供を失って心が乱れた、そしてだいたいの曲は最後には再会してハッピーエンドになるのですが、ただ一曲だけこの「狂女物」の中で子供に再会できない曲があります。それは「隅田川」といいます。他の作品はみな最後に再会すると、ご覧になっているお客様は胸をなで下ろして、心がゆったりして開場を後にされるといったような曲です。

次に「鬼（き）」、これはもう鬼の曲「土蜘蛛」とか「紅葉狩り」があります。「鬼退治の能」そういった作品がこれに入ります。これらを称して「神」「男」「女」「狂」「鬼」というのです。

近頃はこの五番を全てやるというのは時間的にはもちろん可能ではありません。従いまして、神の能というのはドラマチックでない作品が多いため、つい

足が遠のいて、面白い方へ、面白い方へと皆が赴く傾向にあります。一寸神の能が疎外感を持って・・・

そのほか修羅能とか女性の能、狂女物などが多く上演されます。また四番目に類するものは、一、二、三、五に当てはまらないものは全て四番目に組み入れる。ですから私は括弧して現在物とか雑能と、そのほかのものという意味で分けておきました。

能の演じ方

今私の舞いましたのが「仕舞」ですが、実際の能というのは装束を着て、面（おもて）をかけて、・・・何故「めん」とはいわないで「おもて」というのかはわかりませんが・・・面と書いておもてといいます。

近頃気がついたのですが、たぶんおもてと呼ばせるのは「裏表」のおもてではないでしょうか。それを「めん」ではなく「おもて」と称する。それくらい能の世界では「面」というものを非常に大事にし、代々六百年間続いているお宅ですと、「本面」という物が代々伝わっています。

着ている物というのはすぐ朽ちてしまいます。「仮面」、「面」というのは長持ちいたします。「面」につきましては後ほどまたふれます。

さて、この能というのは、ユネスコで認定された、まことにめでたいこととは存じますが、私はちょっと異をとнаえています。なぜかといいますとユネスコにおきまして、「口承遺産」、口で承る、そこまでは良いのですが、遺産というのはどうなんでしょうか。なんだか遺産といわれると生命力を失ったもののような、まあ、親の遺産ではありませんが、どうもあんまり生き生きとした感じがしないものですから、私は遺産という言葉をあまり好みません。でもそのような認定を受けたわけですから、我々も大いにその責任を感じてこれから後世に、次世代にも能をしっかりと受け渡していく義務をひしひしと感じています。

能は六百年の歴史と一口に申しますが、六百年を一口で言うのは大変ですが、どんなどころからどういうふうになってきたかを、六百年を3分間ぐらいに縮めて話してみます。歴史の本というのは沢山の本が出ています。私のように舞台上で演ずる人間が偉そうに歴史を語るなどということは不遜でもございますから、3分ないし5分で申し上げますと、だいたい奈良時代に渡来しました「散楽（さんがく）」（文字は散るという字を書きます）というのがあります。

「散楽」というのはどういうものだったか、物の本によりますと、たとえば「手品」とか「独り相撲」、当時は「てじな」といわず「てずま」といっていました、それから「一人芝居」とかちょっと劇的なもの、とにかく「雑芸」なのです。そういう物がいろいろ混ざったものが伝わってきたそうです。

その中の劇的、音楽的な要素がだんだんと「能」や「狂言」に分かれてきたと推定できるわけです。それではその後すぐに「能」が生まれてきたかということそうではありません。当時は「能」とはいわず「猿楽（さるがく）」と呼ば

れていました。その「猿楽」より先行の芸能に、「田楽（でんがく）」というのがあります。「田楽」は鎌倉時代の初期からありました。能の大成者であります観阿弥という人は鎌倉の末期に生まれています。そして室町時代に活躍しました。その子であります世阿弥という人は室町になって生まれました。「散楽」というものからいろいろな芸能が発生してきたわけです。「田楽」というのは非常に流行っていました。能も田楽の影響を十分に受けたようにいわれています。よく食べ物に田楽、味噌田楽とかありますね。田楽というのはだいたい「鷺足」そして白い袴を履く。こんな袴ですね、そして色の付いた「衣（きぬ）」をかぶる。この姿が田楽の姿であると書いてある本がある。そうするとどうですか、味噌田楽でしょう。ですから味噌田楽といっても茄子ではだめなのです。お豆腐なんです。お豆腐は白いでしょ。白い袴履いてお味噌がのっている、茶色い衣着ているでしょう。鷺足というのは一本足でしょう。串が刺してあるでしょう。これで田楽というんだそうです。嘘か本当かという、たぶん、俗説ではあろうと思いますが、そういう話が残っています。

そういう先行芸能の影響を大いに受けながら、能が発展してきたのですが、世阿弥の時代にはどんどん高尚になってきた。お父さんの観阿弥の時代にに戻りますと、だいたい鬼の能が得意だったそうです。ところが世阿弥は考えました。上つ方（うえつかた）の目にかなうような作品を作らなかつたら能は滅んでしまうとも思ったのでしょ。当時は“座”制度ですから、一座を養っていく、ですからそれは必死なものですね。頭領の腕一つにかかっているわけです。必死になって作品を作り出していきました。ですから世阿弥の作品は大変に数が多いのです。ところが近頃の学説ですと、今まで世阿弥だ、世阿弥だといっていたのが、どんどん話が変わってきて、いやそれは違うという学説がいまだに出ています。能楽研究はまだ発展途上ということになります。

世阿弥の頃は足利義満という人に大変親子が可愛がられて、その後になりまして将軍が変わりますと、すぐ世阿弥親子はひいきを失うわけです。ですから時の権勢者の庇護というのは怖い物ですね。その人の思いでもって、すぐ今まで蝶よ花よと扱われていたものがいっぺんに路頭に迷うような、そういう厳しさをもっていた、と思います。ですからその当時の作品が一番厳しくて、またすばらしい作品が多いですね。

室町期に大成された能が、次に安土桃山という、南北朝をとおして安土桃山時代を経て参りますと、今度は秀吉という人が出てきます。この人が大変に能狂いをした。一説には秀吉は金春流という流儀を非常に愛した。能を「式楽」にしたのは徳川幕府といわれているのですが、秀吉のあたりから能の役者をいろいろな編成にして纏めだしたのだらうとおもいます。

秀吉は能面に名前をつけた。こういう名前。一番若い、後ほどスライドでご覧いただきますが、一番若い面、これを「小面」といいます。三つすばらしい物を持っています。一面には「雪」という名を付けました。「雪の小面」それから「月の小面」もう一面に「花の小面」と名前を付けました。そして三人の人達にそれを分け与えたのですね。「花の小面」というのは金剛大夫、それから

「雪の小面」は金春大夫に与えた。まだ一つあるでしょ、月ですね。月は徳川家康に与えた。大夫の家にあるのは現存しています。私のところに「花の小面」の写し、今わかりやすくいうとコピーですね。コピーというとなんかいやな感じがしますが、これが「花の小面」です。金春大夫にさし上げたという、「雪の小面」は今の金剛家にある。さあ、月はどこへ行ったかな。月というのは実は江戸城にありまして、本丸が大火事にあった、そこで焼失したといわれています。現存していないようです。

秀吉という人は非常に能に精通してですね、まあお金も沢山使ったのでしょう。その時代の次の時代という徳川家康でしょう。家康は実は観世流だったのです。家康は観世流を非常にたしなんだ。そして、その代々の将軍というのは、その好みが変わりますから宝生流を愛したり庇護したりなどいろんなことでございます。そういう江戸三百年というのがあります。能楽師、能役者と申しましょうか、時の幕府の庇護の元に生活するようになりました。今でいうところの国家公務員のような、ちゃんと屋敷ももらう、官舎ももらう。かごで登城できたりした。帯刀も許された。という話でございます。しかしいつまでも江戸三百年続きませんよ。文明開化の音がする、そんな時代が参ります。そうすると今まで諸大名に扶持をもらっていた能役者は当然扶持を離れざるを得ません。そこでみんなちりぢりばらばらになった。ある人は鉄道省に勤めた。私の祖父は鉄道省に勤めていました。ミルクホールもやった、祖父の話ですよ。一銭も儲からなかった。

扱、そのほかの人達はそれぞれの才能があったかどうかわかりませんがちりぢりばらばらになって謡や能どころではなくなったわけです。そして明治になります。今五百円札の肖像になった岩倉具視という人が西洋に視察に行かれまして、ドイツか、フランスで大変歓迎を受けた。そしてオペラを鑑賞したりした。そして日本へ帰られまして、もし日本が外国の賓客をお迎えしたときに何をさせるべきか、を考え能の復興第一歩が始まったそうです。明治、大正、昭和と、昭和初期までは連綿と続いていましたが・・・終戦後となるわけです。そのあたりからが私たちの時代となるわけなんです。

名人が傑出して出てきた時代というのは明治時代が多かったようです。戦後は混沌とした時代が長く続きましたので、また新しい能楽復興運動、適切な言い回しかどうかわかりませんが能楽ルネッサンスといったような時代を迎え、その旗頭が観世壽夫という人であった。そうして今日に至っているわけです。そういう歴史の中で育まれてまいりましたけれども、実際には役者だけが能をやっていれば残るというものではありません。やはり時代時代に生きていないと残りませんですね、死に体になったのではだめなんです。ということは能役者もさることながら、それを支えてくれた人達と共に能は生きてきたのです、それが六百年なのです。そういう風に私は近頃ひしひしと思うのです。ですから皆様方とこういう会でご一緒に、何かを、私の発信をどの程度受けて頂けるかわかりませんが、近頃携帯電話なんてすぐ受けてくれるわけです。ああいうふうに受けて頂けるとありがたいなと思いますが、能というのはなかなか

そういう訳にいかない。一寸途中でも圏外なんていわれて通じなかったりする訳です。

扨、その能のもっとも能らしいことをここで一つお話申し上げます。

ある時にフランスの文化使節団がおいでになりました。ザッキンという彫刻家とか、ヨーロッパの文化使節ですかね、それから映画監督のデュビエなんて人達がおみえになりまして、そして能をご覧になったそうです。私はその場にはおりませんでした。そのとき、彼らは印象の中で「能は死ぬほど退屈だった。牢獄に3年間つながれているより辛かった。」と言ったそうなんです。それを聞きました英文学者の福原麟太郎、当時は高名な方でした。その方がヨーロッパには、「ナポリを見て死ぬ」と言う言葉があるそうですね。ナポリというのはそれくらい美しいところ、それを引用したのでしょうか、「能を見て死ぬ」。このときには私の胸もスーッとしました。ある面では退屈のものだと思います。能は時間がゆっくり経過しますよね。その時代時代でもって能の移り変わり、変化というのがあるはずなんですけれども、やはり時間がかかるということだけは、現実、事実でございます。ですけれども、片一方では外国の方でも、これは現場におりましたのですが、ジャン・ルイ・バローという方が、今お名前を出した観世寿男という方の「半蔀（はじとみ）」というのを見た。そのときに演能がすんでから座談会がありました。「能の静止は息づいている。」と絶賛したのがジャン・ルイ・バロー。もっと具体的にその方はおっしゃっていました。通訳を交えてだったのですが、「飛行機に乗せられているようだ。」と言うんですよね。「飛行機に乗せられて下界を眺めていますと、ゆっくりと動いている。しかしその飛行機のエンジンはものすごく激しい動きをしている。エネルギーを使っている。これが能の姿だ。」とっていました。こんな事がわかるんですね。すばらしいなと思って私はその言葉に感動したのを覚えています。

そのほかに能の精神をうまく伝えてるな、と思ったのが一つあります。それは秀吉と利休の関係です。秀吉はある朝、利休のところへ行って、朝顔がすばらしく咲いていた。朝顔を見にいらっしゃたのでしょうか。朝、夕方朝顔を見に行くことはない。そうしましたら利休は全部花を摘んじゃった。全部花をとっちゃった。そして僕は茶人ではございませんから、言い方が間違っているかもしれませんが、その中の一輪を茶掛けにそっとさした。どのくらい咲いていた朝顔かわかりませんが、これが能の世界かなと、ふっと思いました。だから凝縮している。わーっと咲いているんじゃなく、それ一輪に集約する、それがやはり茶道、利休の考え方と能の考え方がわりと近いところがあるなと、そういうふうに思いました。

それから独楽を例によく言うんですね。独楽というのはゆっくりの時は「ぐわーっ」とこういうふうになっていますね。すごく動いているように見えます。ところがものすごいスピードでまわっているときは静止しているように見えるでしょう。これが能の動きの世界だと。なんだかクエスションみたいですが。後で考えてください。

さあ、それではここで能のスライドを見ながらお話しします。

これが能の楽屋のスライドです。

今鬘を結っているところです。これちゃんと見えていますか。鬘を結っている人がいますね。これ結っている人は私なんです。着られている方は観世榮夫さんです。

このスライドは社団法人鏡仙会から拝借した物です。ご紹介しておきます。これが唐織りですね。面をかける前の楽屋で支度しているさまをご紹介致しました。

これが屋島という曲なんです。なぜ私がこれを選んだかといいますと、先ほど修羅能と申しましたでしょう。源平の武将を主人公としてドラマが進んでいきます。これが修羅能の中には「勝修羅（かちしゅら）」「負修羅（まけしゅら）」というのがあります。これが義経なのです。義経が出てくる「屋島」は勝修羅といいます。持っている扇やら衣装、衣装とは言いません。装束といいます。全部甲冑をあらわしたものです。

これが「負修羅」、これはたぶん「敦盛」だと思います。さっき私が舞った敦盛のある場面です。こちらの方は「負修羅」で平家の武将、先ほどの源氏の武将。平家の武将は着ているものが一寸違います。絹、あの一重の装束で、ちょうど皆様のお着物でいいですよと絹の着物のような透けたような仕立てになっています。面も非常に優しい顔です。ここに扇が見えます。平家はたいがい負け戦なのです、能に出てくるのは。ですからこの太陽は昇る太陽ではなく落日を表した物なのです。

これは皆様よくご存じの、羽衣の天女の衣を漁夫にとられてしまったときの姿です。

これが天人が羽衣を着てだんだんと喜びの舞と共に天高く昇天していく。この装束はまことに見事な物でありまして、これたぶんプラチナでできているのだと思います。これは今の梅若六郎さんが舞っていらっしゃって、梅若家に代々伝わっているお装束ではないのでしょうか。すごく豪華ですね。もう能装束の限度ぎりぎりと言う感じがします。これ以上いくと、もうちょっといくとどうなんでしょうかね、ヤマトタケルの世界とか猿之助の世界になっちゃうかも知れません。

しかしこれはぎりぎり素晴らしい、貫禄のある・・・これは私の勝手な独断と偏見でございますので、誤解のないように。

これは「井筒」、世阿弥の有名な「井筒」という作品の一場面です。これが簡素な作りですが井戸になっています。初冠に老懸（おいかげ）というのを付けているのです。ということは女性の姿なんですけれども男の扮装をしている。そういうちょっと複雑な作品なのです。

これからは2, 3枚続いているスライドを拝借しました。これは「船弁慶」という作品のこれから尼崎の方へ落ちて行こうという義経主従なんです。ここに出てきていますのは、ちっちゃいでしょう。子供が義経の役をやっている。能というのは子供の役を大人がやる場合と、大人の役を子供がやる場合、子供の役を子供がやる場合、一寸分かりにくかったですか。子供の役を子供がやるのは当たり前、ですよ。大人は一寸できません。そういう役柄とそれから大人の役でありながら子供が演ずる。だいたい能はシテを中心に舞います。シテ中心主義でございますので、あんまり相対する人間を、こう排除していく、子供というのは存在感はありますが劇の進行にあんまり入ってこない。そういう意味で子方を起用しているのだと思います。

これは静御前が義経の前で別離の舞を舞っている。静御前は白拍子ですよ。白拍子というのはだいたい男舞を舞うのです。男舞の象徴を一つお教えしましょう。ここに烏帽子があります。烏帽子は男性の衣装の一つですよ。有職などでは烏帽子は男性しか使いません。

別れを惜しんで早、船出でございます。こんなに簡素な舟に大勢が乗っている。これが能の独特のいわゆる作り物というふうに考えるのですが、白い包帯で、竹でできたものを巻いたものです。最小限舟に見える、最小限、これ以上省略すると舟に見えない。というぎりぎりのところまでのデザインになっていますね。今のように車があるわけではありません。まあ大八車とおぼしきものに、いっぱい面や装束を積んであっちへ行ったりこっちへ行ったりして興行をうってきたのでしょ。日本は山坂が多いですよ。平地よりアップダウン、山坂山坂です。そういうときにこういう作り物、これ折りたたみの竹細工ですから持ち運びも便利、軽いとか意外にこういう知恵もあったのではないかなと思います。

これが船弁慶の最後。私が舞いましたもの。長刀を持って義経主従に襲いかかる。これもほとんど面がみえません。これでほとんど「船弁慶」が登場から、舞から、船出から、襲いかかる。4駒漫画みたいに一通りストーリー順に組み立てたつもりです。

これは同じような曲ですが「鶺鴒」という曲で、松明を持って、これ亡霊です。お爺さんの姿をちょっと、能のお爺さんは、こんなになっています。能の場合にはお爺さん以外は丁髷（ちょんまげ）を結わない。どんなに現代人でも出て参りましてもお爺さん以外に丁髷を結うことはありません。ちょっとご覧になりにくいと思いますがそのために持って参りました。

これは後シテ、閻魔大王のすがたです。この閻魔大王といっても「鶺鴒」の閻魔大王は、地獄でさんざん苦しめるというだけではなく極楽へ導いてやるという非常に善行のある閻魔大王に仕上がっています。

これが「野宮（ののみや）」といいます。先ほど世阿弥の作品という説が覆っているとお話ししましたが、これは六条御息所（みやすどころ）をテーマにした作品でございますが、この「野宮」はちょっと前まで世阿弥の作品だと私も信じていましたが、学説が変わりまして金春禅竹という人の作品ではないかと最近はいわれています。金春禅竹という人は世阿弥の娘婿に当たる人です。これも六条御息所を扱った作品ですけれどもこれからお見せするのも六条御息所を扱った作品なのです。こういうのもあれば、（スライドを変える）こういうのもあります。これはもう完全に生き霊となって六条御息所の霊が葵の上に襲いかかろうという激しい怒りと嫉妬と、また悲しみを含んだ能です。後ほど面は別途お見せします。

さあこれから早回しですが面をたくさん見て頂きます。面をご覧いただくということが能の世界をある程度かいま見られますので、たくさんありすぎて退屈されるかも知れませんが。

これは「翁」という作品のみに使用されます。能面が完成する以前の影響を受けた面です。それはどういうことかといえますと、ここが「切り顎」になっているのです。顎が切れています。舞楽面などもみんな顎が切れています。そういう影響を受けています。そして翁だけなのです、切り顎というのは。それから翁と父尉（ちちのじょう）と三番叟の三つの作品だけがみんな切り顎になっています。

次にお見せするのが父尉、おなじ尉でも一寸趣が異なります。これは曲線の皺が非常に美しく描かれていると思います。それとこの目のところがとてもかわいい。可憐な感じもしますね。

これはごくごく普通の能に出てくるお爺さんの役、「笑尉（わらいじょう）」。一寸笑みを含んでいるので笑尉と申します。

これは「阿古尉（あこぶじょう）」。一寸物憂い感じがします。菊作りの老人が女御（お姫様）を垣間見て恋の病にとりつかれた作品恋重荷などに使います。

これは「木賊尉（とくさじょう）」。木賊という曲目にあわせて作られてと思いますが、現在はいろんな作品に使っています。頬の垂れ下がっているところが非常に特徴があって、面白い物だと思います。

これは「皺尉（しわじょう）」。まあ皺があんまり強調されていないのですが、手に取りますと皺が非常に複雑に・・・ 今までのお爺さんは舞を舞ったりするときには使わないお爺さんです。この皺尉というのは舞を舞うときに出てくるお爺さん、すなわち「舞尉」とも俗に言われています。たとえば「遊行

柳（ゆぎょうやなぎ）」の柳の精。「西行櫻（さいぎょうざくら）」の櫻の精。そういう作品に・・・ もちろん古木の精ですよ。若木の櫻では出てきません。

これは「三光尉」（さんこうじょう）。観世流では代々三光尉は使わなかったのですが、近頃では観世流でもよく三光尉を使います。他の面はいい面が少ないのですが、三光尉というのは作家が彫りやすいんですかね、駄面がないですね。だいたい作品にいい物が多いです。

これは「茗荷悪尉（みょうがあくじょう）」。悪尉というのは悪いということではなく強いお爺さんというようにご理解ください。なぜ茗荷かというと、目のところが茗荷みたいに見えるでしょう。あんまり位の高い老いた神様には使いません。末社の神様。

これはあんまり髭と目が凄いのであんまり使う作品がないのですが、「要石悪尉（かなめいしあくじょう）」といいます。あんまり長いことご覧になると今夜、夢を見るといけないので...

これが「小面（こおもて）」。女性の面の中で一番若い顔をしている。ですからこの下のふくれた感じと目の切れが違うんです。これは四角く切れている。だんだん歳をとった顔になるほど四角が丸みを帯びてくる。こういうなんか目に見えない、目のところで目に見えないはおかしいが、目に見えないところで苦心が施されている。

同じ小面でも少し面長でこちらの方が少し成熟度が増したような、これは素晴らしい面ですね。きれいですね。

これは「孫次郎」。観世鍔之丞家では孫一と申しておりますが、孫次郎といってよろしいかと思えます。孫次郎というのは金剛孫次郎という方がいらっしゃいまして、その奥様が早逝なすった。大夫が奥さんの面影をしのんで彫ったというのが基になっています。それは今、三井文庫にあるのです。それは通称孫次郎ともいいますが「面影」と呼ばれています。その系統の面なのです。

これは「近江女」。入り口のところにパネルが何枚かありまして、あれ全部私が舞っているのですけれど、一番最初のところに出ていたと思います。「道成寺」、鐘が出ていて扇を前に持っているあの道成寺等に使用するのが近江女。一寸普通の女性と違い何かつきもの的な、よく見ると非常に色気があるのですが、怪しい色気でしょうか。

これは羽衣の天人などに使う面です。これはごくごく普通の「増女」という面。きれいですね。無垢な感じがいいですね。

これも同じ増女ですが雰囲気が違うでしょ。これは偶然なのですがさっきのパネルにあった、私が「楊貴妃」を舞った時、拝借して使った物です。お帰りになるときもう一度ご覧になると、面だけ見ると、扮装をして、面をかけているのを見るのと趣が違うのがわかると思います。これは私の大好きな面です。

これが目のところがだんだん丸くなってきている「深井」。狂女ものと先ほど申し上げました。子供と分かれた母親の憂いみたいな物が感じられますか。頬が大分くぼんでいますよね。

同じなんですけど、次に「曲見（しゃくみ）」というのをお見せします。同じ系統の面なんですけど、一寸けがきとって毛の描き方が違いますが、こちらの方が、顔がしゃくれているというので曲見という言い方をします。曲見の特徴は毛の描き方にあります。

これは一寸特殊な面で「泥眼」といいます。「葵上」の六条の御息所の役などに使います。目のところに金泥が入っている。それで泥眼といいます。一寸怪しい目、これが高じてくると般若になる。

これはやせ衰えた女性の姿ですね。この作品は違いますが、こういう作品を得意として作った人に氷見という作家がいる。お坊さんですね。お坊さんですから年中そういう人と相対しているのですね。富山県の氷見、鰯で有名な。その在の人だそうです。この作は全然違います。大宮大和という人の作です。

これは「橋姫」。今は「鉄輪（かなわ）」という作品に使う面になっています。

これは渋谷あたりに横行していました。「山姥」です。山の精ですね。これも女性の面ですよ。

これが「般若」。これは是閑という素晴らしい作家の作品で、この顎あたりの張りとか、角の生え方、ものすごく大胆です。般若坊という人が創作したので般若と呼ばれています。たぶん僧籍の方でしょう。

これから男の作品にうつります。

これは「喝喰」といって、これは半俗半僧です。まだちゃんとしたお坊さんになっていない方、学僧ですね。まだ頭を剃ってない。だいたい禅宗の寺で修行している。そういうのを喝喰僧といっています。そういう役に使います。

これは「若男」といって、源平の武将、特に平家の武将などに使います。次の「中将」という面とあわせてご覧ください。これも平家の武将として使ったり、あるいは、村上天皇の役にも使う。雅な感じの面です。面長ですね。

これは「今若」といってやはり源平の武将。同じ男面でもいろいろこういうふ

うに同じように見えますがだんだん違いがわかってきます。

これは盲目の青年。「弱法師（ようぼうし）」。弱法師というのは実はあだ名でして本名は俊徳丸。歌舞伎でも俊徳丸の伝説は取り上げられている。能では「弱法師（よろぼし）」に使われる素晴らしい面です。

これ実はですね普通の面より、盲目の面なのですが目の切れが横に切れている物ですから視界は通常の面よりずっと広い。ですけれどもじろじろ見ちゃだめなんです。演技をするときにね。

これは源三位頼政。源平の合戦で、まあクーデターを起こして無惨にも割腹せざるを得なかった。平等院で扇の芝というのが今でも残っているでしょう。

「埋木の花咲く事もなかりしに身のなる果はあわれなりけり」という辞世の句を詠んで割腹しました。よくご存じの忠臣蔵に「かぜさそう...」なんて有名な辞世の句がありますね。辞世の句を武将が詠んだのはこの頼政が初めてだといわれています。

これは「慈童（じどう）」といいます。ただ単に子供というのではなく、神がかっているかな、仙人に仕えている子供です。

これは亡霊の顔。これが氷見という人の作です、紛れもない。これはもう文化財に指定されている物です。これは名品中の名品。「蛙」といいます。蛙とかきます。気持ち悪いことって申し訳ありません。やっぱり水死人の顔ですよ。で蛙という名前がついたんですかね。

あとは今日持ってきませんでした「瘦男」というのがあります。この「蛙」というのは素晴らしい面なので是非皆様に見て頂きたいと思って中に入れました。

これは神様に使う面「霊神（れいじん）」といいます。霊の神様と書いて“れいじん”。

これは「顰（しかみ）」です。顔をしかんでいる。何か酸っぱい物を食べたときのような、そういう顔にみえれば顰の名前もおわかりいただけだと思います。

これは「小べし見」。「へしむ」というのは「うーん」と口を結ぶことをいうんだそうです。これは完全に口を結んでいるでしょう。

「大べし見」「小べし見」「黒べし見」と三通りございますが、今日は大べし見はありません。これは蜘蛛の精とかあまり品位の無い役に使います。

これは「牙飛出（きばとびで）」。ここにほれ牙が上下で四つ出ているんですね。これが特徴です。これも素晴らしいですね。全て金泥で彩色してあります。「飛出」目が飛び出ている。飛び出している。

これが「獅子口」。口が垂れ下がったようになっています。
この面は、私のパネルの中に獅子の面をかけているの、あれです。観世宗家の本面なのです。本面というのは代々伝わっているもの、それを使わせて頂いたのです。前の獅子口は観世鍔之丞家の本面。昔は別家というのを継ぎますと、ある程度面とかいろいろなものを分け与えるのですね。そこで親子の獅子で対になっていたものが、鍔之丞家を創設するとき面を上げてるのです。ですから前の面は鍔之丞家にあり、親の方の面は観世宗家にあります。というように別れ別れになったわけです。これは同じ獅子なのですが、流儀によってこんなに違うのです。これが宝生形の獅子口。

これは「猩々」。赤い顔をしています。これはお酒の精というか、海の妖精、お酒の妖精でもいいですね。これは猩々という曲に使います。よくお人形さんなんかで杯を持って赤い毛をしているのご覧になったことがあるでしょう。これが猩々です。
これは、面相を観る方でも大変に福相をしていると行ってました。いい顔しているでしょう。なんかハッピーな顔。

これが「黒髭」。髭が沢山、一寸見にくいですが髭が逆立って顎髭が生えている。これは「龍神」に使う面です。龍神です。龍以外には使いません。

以上です。
大分時間も押してしまいましたのでここで10分ほど休憩にします。

テキストはいろいろ作ってあるのですが、不慣れなためなかなかその通りにならないで申し訳ありません。
能における各役の分業制度のところはご一読ください。現在残っている流儀の名称を皆書き出しておきました。
能舞台はこんなになっているということで、有名な舞台を二つあげさせて頂きました。右下にあるのは巖島神社の能舞台ですね。海の中にそそり出た舞台という特徴があります。もう一つは西本願寺北能舞台です。これは桃山時代の作品で1580年代の作で、国宝になっています。これもまた有名な能舞台です。ここで能が行われ、たぶんその正面で秀吉などが能を観たんでしょうね。
次に能舞台の略図がございませう。屋根とかいろんなところに少し説明がございませう。橋掛かりの松のことなども一寸書いてあります。遠近感を出すために橋掛かりの松も大きいのからだんだん小さくなっている。今はもうほとんど同じ高さみたいにしてしまっていますが。本当は手前からだんだん低くなって丁度遠近法にかなった作りになっています。舞台の同じ板でも「撥転がし」といって幾分かこちらに傾斜しています。撥を捨てたときに観客席の方に転がらないで、手前の方に転がるよう、本当に微妙ですがそういう工夫がしてありま

す。これもお読みください。
面、能装束の話、今度またやりましょう。

能の楽器、ここもお読み頂ければだいたいわかるでしょう。

能の型。型が一番最初に仕舞を五番舞わして頂きましたので、ああいうのが能の舞いだなあというふうにお考え頂ければいいと思います。
それから橋掛かりの使い方というのをちょっと書き出しました。登場と、退場にはもちろん使います。けれどもそのほかに、過去現在、メインステージ、本舞台が現在だとしますと、幕の方が過去です。橋掛かりはその現在と過去を橋渡していると考えられるとお能が理解しやすいと思います。それから旅行、道行きですね。橋掛かりへ行って一回りまわってくると奈良から京都まで来ちゃう。それからまだあるんですね。内と外。橋掛かりの方が外。この本舞台の方が内。外と内という使いかたもいたします。もう一つは舞に変化をつけるために橋掛かりを縦横無尽に使う。これは通常は舞台の中でやっているのを、橋掛かりを使うことによって変化を、より変化をさせようという使い方もあるわけです。

次に二部の方の、能の謡を皆様と一緒に体験して頂こうということになっているのです。

あまり時間がないので十分にはいかないかも知れませんが。

謡というのは能の歌謡の部分の指しています。

発声はもう皆さん方の地声でいいんです。地声で結構です。さっき訂正して頂きました基音と書きましたが、基音になる楽器が無いということは、実は能の楽器ここに書いてございますね。打楽器ばかりですね。三つ打楽器がありまして、一つが笛になっています。笛はことさら、笛の音色によって謡の音の高さを定めたりなんかするものではありません。基音が無い。あくまでも基音はご自分の出した声が基音だとお考えください。その基音は急にはなかなか定まらないので、だんだん繰り返していくと、勘も良くなってきます。そしてご自分の基音を作るのです。昔はみんな屋外だったでしょう。ですから世阿弥の本なんかにはいろんな事が書いてあります。座敷の吉兆を知れ。吉か凶かどちらだろう。凶の場合にはもう一つ手だてをしなければだめだ。だいたい昼間、明るいときには地味に謡え、夕方になったら派手に謡え。簡単に言いますとこういう事が書いてある。それからあと声の出し方というのは、祝言とか亡憶とか難しいことをいっていますが、現在、強吟、弱吟と二種類に大きく分かれています。が、当時は分かれていなかったのです。目出度い気持ちで発声しろというのがツヨ吟の声なんですね。それが今のツヨ吟となったのでしょう。もう一つは憂いとか悲しみとか、女性の持っている優しさとか、そういういろいろな軟らかい表現をするときには亡憶の声を使いなさい。それがたぶん、今でいうところのヨワ吟と称するもの。謡い方のところにツヨ吟、ヨワ吟と書いてあります。

たぶんそれに相当するのだらうと思います。

リズムの取り方も三通りありまして、そのほかに涉り調子とか小歌とかある訳ですが、あまり意識なさらないで結構なのです。

拍子にあう謡というのと、あわない謡というのがあります。リズムに合わないという、リズムが無いわけでは無い。拍子に、間拍子に規制されないということです。そういう謡い方もあります。

だいたい謡というのは七五調でできています。「なにがなにしてなんとやら」こういう調子ですよね。ですけれど拍子にあわない謡というのは、そういう七五調ばかりではありません。散文的なものもあるのです。それから特に声の出し方で、注意するというのはいないんですが、ツヨ吟の場合には、胸に強く、こう訴えるようにして声をだすとツヨ吟になりやすいと思います。それからヨワ吟というのを謡うときには、少し頭部へ響かせるようにして発声してください。

ツヨ吟というのは、ピアノの鍵盤にのりません。ヨワ吟というのは鍵盤、五線譜で書くことができるのです。でも謡にはなりません。のせることはできましても謡というものにはなりません。ただ単に音の順番が羅列されただけ。声を出すというのはいづぶん苦労されたかたがいらっしゃって、謡の伝書には、声の出し方、実際には、江戸の時代には額に紙を貼って、紙が動かないように発声しなさい、なんて書いてある書物があります。それは金春流の伝書に書いてあるんです。紙がカーッと動いちゃいけない。無駄に息が出てはいけません。金沢明子という民謡の人がしゃべってました。民謡も蠟燭を立てて、炎が消えたり動いたりしないようにして練習するんだと聞いて、あれどこかで聞いたことがあるなあ、謡の発声にもそういうことを言ってる文書があったなとそのとき思い出しました。能に「大原御幸（おおはらごこう）」という作品がありまして、その作品につれ役で登場するのに、後白河法皇、この方は非常に音曲がお好きな方で、一生の間に三回喉を壊した。喉をつぶした。後白河法皇が「梁塵秘抄（りょうじんひしょう）」と言う本を纏めていらっしゃる。この中に声の出し方についてふれているところがあるのでご紹介します。謡にも一寸は通じるかなと思うところです。上体は青柳のようにしなさい。腰は巖のようにしなさい。上体は柔らかく、腰はどんと据えて、丹田に力を込めると、とって頂いて良いと思います。吸った息はお腹までまわしなさい。そして持っている息は全部使ってはいけません。全部無くなるまで発声してはいけませんと書いてある。音曲をなさっていらっしゃる方には一寸役に立つ言葉です。これは後白河法皇が言っておられる言葉です。梁塵秘抄に書いてあるのです。

以下謡の指導に入ります。

[*クリックすると、大きい画像を表示します。](#)

